ニュース

阪神・淡路大震災から25年

神戸別院で法要　1・17の記憶、教訓を次代へ

阪神・淡路大震災から25年が経った1月17日、神戸別院（神戸市中央区）は物故者総追悼法要を営み、150人が参拝した。

杉本正信輪番を導師に正信偈をおつとめし、犠牲となった6434人を追悼した。

兵庫県内にある宗門校の学生・生徒5人が、「命をつなぐ」をテーマに作文を朗読した。震災から四半世紀が経過し、震災の記憶、教訓の継承が課題となる中、5人は「生きたくても生きられなかった多くの人たち」に思いを寄せ、命をみんなで協力して守っていける世の中を築いていくとの決意を語った。

この中、神戸市東灘区で被災した父から「いろんな人の支援で生きることができた」と体験談を聞いた坂田瑞希さん（神戸龍谷中学校1年）は、「やはり人間は支え合わないと生きていけないと思います。私も災害などが自分の住んでいる地域で起こったら、炊き出しのボランティアなど、自分にもできることで住民や家族を支えたい」と語った。

「生きたくとも生きられなかった人たちがたくさんいるのよ」。毎年1月17日に母親からこう諭されてきた濱本紗貴子さん（兵庫大学1年）は、8年前に当時暮らしていた横浜市で東日本大震災に遭遇した体験を振り返り、「母の言葉を思い出した。皆の助け合い、支え合いの中で私は生かされてきたと思うのです。これからも皆の輪の中で、皆と共に感謝の気持ちを忘れずに、毎日を精いっぱい生きていきたい」と語った。

また法要後に「1・17いのちを考える研修会」を開き、作家の家田荘子さんが講演した。

（8面に関連記事）

「お寺ないと困る」「法話聴きたい」

10年間で2度の本堂再建

大震災で本堂が倒壊した東灘区・西林寺

神戸市でも特に被害が大きかった東灘区にある西林寺（藤川正敏住職）は、地震発生時刻の1月17日午前5時46分と午後2時に追悼法要をつとめた。

同寺は、震災の前年11月に落成したばかりの本堂が全壊、庫裏も大規模半壊した。当時41歳だった藤川住職をはじめ寺族5人は無事だったが、門徒34人が犠牲となった。

震災直後、同寺の日曜学校卒業生の村田真一さんと共に一人暮らしの高齢門徒の救出に奔走した藤川住職は、「門徒さんたちも被災して大変な状況。募財を再びお願いできない」と、本堂の再建は考えなかったという。

震災の年の7月に発行した寺報「西林寺だより」には、倒壊した本堂の写真とともに「無念、悔しい、本当に悔しい。門徒の方々、有縁の方々、申しわけございません」と心の叫びを記し、門徒に詫びた。

しかし、震災後に亡くなった仏教婦人会会長の橋本ふさのさんの遺族から「母は強く本堂の再建を望んでいました」と金一封が届けられたことから、「西林寺、夢の本堂再建募金」を立ち上げると、「お寺のために、たとえ1円でも少しでもと毎日、コツコツと蓄えました」などとさまざまな思いを添え門徒らから浄財が寄せられるようになった。そして「お寺がなかったら困る」「法話を聴きたい」と本堂再建の気運が盛り上がり、門徒の募財で平成14年に鉄筋コンクリート2階建ての「地震に強い本堂」が再建された。

震災から四半世紀を経た1月17日、周りには震災後に建てられた住宅が目立つ西林寺の本堂（写真右）で藤川住職は、「10年で2度の本堂再建に協力してくださった門徒の方々には本当に感謝しています。この本堂は門徒さんと私が仏さまのお話を聴かせていただく場。再建後、毎月8日の常例法座は欠かさず続けさせていただいています」と話した（同上）。

25年の歳月を振り返って、震災後の日々を「僧侶とは何か。住職とは何か。お寺とは何か」を自問しながら門徒と共に歩んできた日々だったという。